

【論文提出者】 社会文化科学研究科 人間・社会科学専攻 フィールドリサーチ領域
王 辰寧

【論文題目】 中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用分析
—作文コーパスをデータとして—

【授与する学位の種類】 博士（文学）

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、中国語を母語とする日本語学習者の作文に見られるヴォイス諸構文（受身文、使役文、可能文）の誤用について、大規模な作文コーパスを用いて、その実態と原因を明らかにすることを目的としたものである。

本論文は、全8章から構成される。まず序論（第1章）で本研究の目的と全体像を示している。続いて、現代日本語のヴォイス（態）および日本語学習者のヴォイスの誤用に関する先行研究のレビューを行い、具体的な課題を設定したうえで（第2章）、本論文で調査に用いた作文コーパスの概要と調査手順を示している（第3章）。

続く各論に当たる章では、受身文（第4章）、使役文（第5章）、可能を表す諸構文（第6章）について、作文コーパスに見られた学習者の誤用を整理し、その全体像を示すとともに、整理されたパターンごとに、推定される誤用の原因を分析している。さらに、これらの章の分析結果の共通性と相違点を整理するとともに、日本語教育に示唆する点について述べている（第7章）。最後に、本論文で示した研究の意義と今後の課題がまとめられている（第8章）。

本論文の枠組みでは、ヴォイス諸構文の誤用を、まず、助動詞や文末表現の用法の誤りである「述部の誤用」、述部に対応した格体制が作れていない「格助詞の誤用」、両者の誤りを含む「格助詞の誤用+述部の誤用」の3類型として捉える。さらに「述部の誤用」は、ヴォイス表現の「欠如」、「過剰」、「混同」（および「その他」という形で整理される。本論文では、これらのパターンごとに、その量的側面（それぞれの構文で、どのような誤用が多く見られるか）と質的側面（それぞれの構文の誤用にどのような要因が関与しているか）が、広範かつ丹念に分析されている。

本論文の分析には、従来の誤用研究における指摘と重なる点も含まれているが、本論文の意義は、それらを複数の構文を一貫した形で分析するための枠組みとして再構築し、かつ、大規模なデータに基づいてその枠組みの有効性を実証的に示した点にある。また、これまでは十分に考慮されてこなかった、ヴォイス諸構文における述部と格体制の連動の問題、特に格助詞の誤用や、ヴォイス表現に先行する動詞の意味的特徴についても綿密に観察し、誤用を引き起こす要因を具体的に考察している点は、本研究の独創性を示すものとして評価できる。

本論文は、使用したコーパスの資料性を見極めながら、収集した約2千例のヴォイス構文の誤用について網羅的な現象の整理を行い、学習者の母語（中国語）の影響も含め、それらの誤用の原因を可能な限り突き止めようとしたものである。本論文の分析の内容は、堅実さと新規性を有しており、学位論文として十分な水準に達していると考えられる。

以上のことから、本論文は、博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものであると判断した。

【最終試験の結果の要旨】

最終試験は、平成 29 年 12 月 18 日(月)に、審査委員会委員 4 名の出席のもとに、口述試験の形で実施された。

学位論文申請者は、学位論文の内容に関する委員の質疑に対して適切かつ十分な応答を行い、当該研究テーマおよび関連領域において、博士（文学）の学位を授与するにふさわしい学識を持つことが確認された。

以上のことから、委員全員一致で、最終試験の結果を「合格」と判断した。

【審査委員会】

主査 茂木 俊伸

委員 児玉 望

委員 屋敷 信晴

委員 シンジルト